

☆年間第20主日(8月16日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (イザヤの預言 56章1, 6~7節)

主はこう言われる。
正義を守り、恵みの業を行え。
わたしの救いが実現し
わたしの恵みの業が現れるのは間近い。
また、主のもとに集って来た異邦人が
主に仕え、主の名を愛し、その僕となり
安息日を守り、それを汚すことなく
わたしの契約を固く守るなら
わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き
わたしの祈りの家の喜びの祝いに連なることを許す。
彼らが焼き尽くす献げ物といけにえをささげるなら
わたしの祭壇で、わたしはそれを受け入れる。
わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。

第二朗読 (使徒パウロのローマの教会への手紙 11章13~15, 29~32節)

皆さん、あなたがた異邦人に言います。わたしは異邦人のための使徒であるので、自分の務めを光栄に思います。何とかして自分の同胞にねたみを起こさせ、その幾人かでも救いたいのです。もし彼らの捨てられることが、世界の和解となるならば、彼らが受け入れられることは、死者の中からの命でなくて何でしょう。

神の賜物と招きとは取り消されないものなのです。あなたがたは、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順によって憐れみを受けています。それと同じように、彼らも、今はあなたがたが受けた憐れみによって不従順になっていますが、それは、彼ら自身も今憐れみを受けるためなのです。神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです。

福音朗読 (マタイによる福音書 15章 21~28節)

そのとき、イエスは、ティルスとシドンの地方に行かれた。すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子たちが近寄って来て願った。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」イエスは、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところには遣わされていない」とお答えになった。しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けください」と言った。イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」とお答えになると、女は言った。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」そこで、イエスはお答えになった。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」そのとき、娘の病気はいやされた。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

暑い日が続いています。皆様お元気でいらっしゃいますか。昨日15日はマリア様の「聖母被昇天祭」でした。朝と9時の二回ミサが行われました。マリア様がイエス様を通してなされた救いの御業の協力者として体ごと天に召されたことをお祝いする祝日でした。私たちもマリア様に続いて天の国に至ることができるよう、精進しましょう。今日のミサの朗読についてコメントを記します。今日の朗読は神から選ばれた民イスラエルと異邦の民の救いの問題が取り扱われています。聖書とミサの理解が少しでも進めばありがたいです。

第一朗読 (イザヤの預言 56章1, 6~7節)

まず、イザヤ書ではイスラエルの民がその過酷なバビロン捕囚から解放される日のことを述べています。「私の救いが実現し、私の恵みの業が現れるのは間近い」。その救いとは「主のもとに集ってきた異邦人が、主に仕え、主の名を愛し、**安息日を守り、契約を固く守るなら**、彼らを聖なる私の山に導き、私の祈りの家に連なることを許す」ということ。イスラエルの民の救いとは単にイスラエルの民だけでなく異邦の民を含めたすべての人につながるものなのだとのことです。神の救いは誰かのための独占物ではないのです。すべての人に開かれ、すべての人の救いのためにあるのです。

第二朗読 (使徒パウロのローマの教会への手紙 11章13~15, 29~32節)

パウロは自分は異邦人のための使徒であると自認して言います。「自分の務めを光栄に思います」と。それでいながら生粋のユダヤ人であるパウロは神から特別に選ばれたイスラエルの民が主の言葉を受け入れず、救いから離れていることが齒がゆいのです。そのためには彼らに妬みを起こさせてまでも**奮起を**起こさせたいと考えているのです。そして言います。「神の賜物と招きは取り消されない」と。神はどんなことがあっても約束を破る、反故にすることはなさないのです。じっと私たちの立ち帰りを待っておられるのです。放蕩の限りを尽くした息子がボロボロになって父のもとへ帰ってきたとき、真っ先に気づき歩み出て迎えたのは父なる神であるのです。

福音朗読 (マタイによる福音書 15章21~28節)

今日の福音は力強く美しい信仰の女性の話です。カナン人というとユダヤ人から見ればさげすむべき人々でした。ですから、イエスに願い事をするとは何事かと当時の人々は考えていたのでしょう。弟子たちは「この女を追い払っ

てください」とイエスに詰め寄ります。イエスはそれに応えるかのように「私はイスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」と女性に言われます。すると女性はその言葉に食い下がります。このところのやり取りは実に痛快です。福音書のどこにイエスを説き伏せた人、それも女性がいたでしょうか。イエスも感服され「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。」と言われたのです。福音書の中ではイエスからやり込められる男どもはいっぱいいますが、今日の女性は「ヤッター！」と叫んだことでしょう。イエスはこの女性の助けを拒んだのではなく、その信仰のすばらしさを周りの人々に伝えることを望んでおられたのだと思います。久々に痛快な(?)女性のお話です。この女性の素晴らしいところは単純で、恐れを知らない力強い信仰を持っているところ です。イエスは言われました。「願うことはかなえられると信じて祈れ」と。この異邦の民の女性の祈りは、すべての民の祈りの模範であります。

神はご自分に寄り縋(すが)り祈る人を決して拒否なさいません。今日の朗読は先に述べたように、主に選ばれたイスラエルの民と異邦の民がともに救われることを神は望んでおられるということを私たちに教えてくれています。 私たちもこの言葉に従い、私たちの信仰に力強くとどまり、また多くの人が救いに導かれるように祈りましょう。

この時期、コロナ感染症のほかに「熱中症」が被害をもたらしています。特に一人でお住いのお年の方々(私も含め)、冷房を適切に使い、水分をこまめに取りましょう。電気代を節約するというのもわかりますが、今は命を守るために使いましょう。それではまた。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光